



Title	安東璋二教授をお送りする
Author(s)	
Citation	語学文学, 34: 51-52
Issue Date	1996
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8370
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

安東璋二教授をお送りする

函館校国語科教官一同

函館校国文学担当の安東璋二先生には、今春三月三十一日をもって定年退官される。先生は函館市にお生まれになり、北海道第二師範学校予科を経て、昭和三十年、北海道学芸大学函館分校一類文科を卒業された。道立森高等学校に六年間勤務されたあと、早稲田大学大学院文学研究科修士課程を昭和三十八年に修了、ただちに函館北高等学校教諭に補せられた。翌三十九年、函館工業高等専門学校講師となり、昭和四十三年十月に函館分校に転任された。爾来、二十七年半にわたって、函館校国語教室の発展に尽くされたのである。

昭和五十四年の加賀栄治先生の退官後、東海林辰夫先生、舟越芳男先生が続けて退官されると、安東先生は国語教室の長として、長きにわたり若手教官を指導され、研究・教育体制の再構築に尽力された。「急ぐな！勉強しろ！」の加賀イズムが途切れることなく次の世代に伝えられた（のではないかと思う）のも、ひとえに安東先生がおられたからである。その結果、平成四年四月の函館校大学院国語専修のスタートにあたり、前年の大学設置審議会専門委員会による業績審査を、全員が無難に通過することができた。若手に研究の便宜を計ってくださった安東先生に、改めて感謝する次第である。

先生はまた、代議員・図書分館長・分校主事をはじめとする要職を、長きにわたり次々とこなして来られた。とりわけ、平成二年から四年間に及ぶ分校主事の在任中、陶芸棟・総合科学棟の竣功、大学院設置、国際交流協定締結のための訪中・訪豪など、分校の基盤整備、将来の発展のために、多方面にわたって数々の業績を残された。私どものお手伝いはささやかであったが、安東先生とともにかなうな仕事の一端を担わせていただいたことを誇りに思うのである。

先生の研究者としてのスタートは決して早くはない。三十歳を目前に、先生は教職を辞して上京され、早稲田大学大学院に進まれた。映画をこよなく愛好される先生は、脚本家としての道を考えておられたと後でうかがったが、大学院で学位論文として取り組まれた夏目漱石が、先生の生涯の研究の大黒柱となったのである。以後、先生は多忙を極めた大学運営や学生指導のかたわら、漱石を軸とする日本近代文学の研究に精力的に取り組まれ、その成果の一端をまとめられて『私論夏目漱石』として上梓された。漱石文学は、初期作品と前期三部作、後期三部作と晩年の『道草』『明暗』を分けて考えるのが普通である。しかし、作品の実質から、漱石文学は『それ

新刊紹介

安東璋二著『私論夏目漱石』——「行人」を基軸として

本書は、著者の永年にわたる日本近代文学の研究業績の中から漱石を中心とする論稿を集め、その初期から晩年の『道草』あたりまで、漱石の作品研究史の流れが展望できるように構成したものである。概要は次の通りである。

漱石・その文学以前——『我輩は猫である』の成立まで——

『我輩は猫である』論——その性格・位置・問題——

作家意識の形成

『それから』の位置

『門』の考察——小春日和の愛——

『行人』の世界（Ⅰ）——その挫折の意味——

『行人』の世界（Ⅱ）——極北の自我——

『行人』の題名——漱石の世界——

『こころ』の方法——語り手の変容の一視点——

漱石の転相——『こころ』の変容から『道草』へ——

漱石受容の問題——研究史への一視点——

鷗外と漱石——実生活と文学の側面から——

（株）おうふう刊、三三〇頁、平成七年十一月、八〇〇〇円

詳細は函館校国語教室まで照会されたい。

から』を分水嶺とし、ここからその主題が本格的に展開して『行人』というピークに至るのだということ、また、通説のように『こころ』は『行人』の延長ではなく、むしろそれは以後の『道草』『明暗』へと続く晩期作品のターニングポイントであるとする視点を、先生は明確に提示し論証された。漱石文学への長く深い沈潜がこのような大きな結実をもたらしたと言えようが、この意味でも、先生は私どもに無言の範を示しておられるのである。

学生が「ホトケの安東」という称号を奉っていることから解るように、先生は温厚なお人柄である。卒業論文の審査などで私どもが学生の非を厳しく指摘すると、先生は私どもの考えも及ばない視点から学生を済う発言をされることがしばしばあった。それは、学生をかばうというよりも、私どもにみずからの視野の狭さをさとらせる効果をもたらした。先生はまた、きわめて付き合いのよいお方である。酒豪というイメージにはほど遠いが、よく生意気な若造に付き合っただけの夜の街を歩かれた。分校の要職に就かれ、また、一時期は体調を崩されて酒を控えておられることもあったが、それでも事情が許せば、よく仲間になって下さった。明るい酒で、談論尽きることなしという趣き、いつも楽しい場に私どもを置いて下さった。

先生が退官されたあと、わが教室がどうなるのか、はなはだ心もとない。幸い先生には、退官後も函館に腰を据えられて、函館文学学校校長など、これまでの時間的制約から少しは解放された楽しいお仕事をされるとうかがっている。私どもへの御指導も、決してお忘れなきようにと願うものである。最後に先生の一層の御健勝をお祈りし、先生への感謝の辞とさせていただく次第である。